

ズだって採りますよ」と言った。それを聞いた高桑さんが笑いながら「コブは無理だけど、今ハナノミには一番良い時期だ。ハナノミ採ってこい」と返してきた声には張りが出ていた。虫のことに  
なると思わず力が入るんだなあ。

奄美から帰った私は力のない高桑さんの声が頭から離れなかった。そんな中、元横綱千代の富士の訃報はショックだった。7月31日すい臓癌で逝去。どうか高桑さんにも、ご家族の耳には入りませんようにと祈るような気持ちだった。病気と闘おうとしている高桑さんには聞かせたくないニュースだった。

8月25日、旅先の私に、新里さんや勤務先から高桑さんの訃報がもたらされた。「こんなに早く?」「どうして?」という思いが次々に湧き上がる。

9月19日、8年前に高桑さんの還暦をお祝いしたあの会場でお別れの会が開かれた。会場は同じだが高桑さんは写真の中、そして遺品の中にしかない。藤田さんの話やその日配られた『月刊むし』の記事で詳細を知る。会場で奥様の洋美さん、舞

さん、翔君と話ができて良かった。私は高桑さんに手を合わせ、少し早めに会場を後にした。

高桑さんの周りにはいつもその人間的魅力に惹かれた方々がいた。それぞれの方に、その方だけの高桑さんの思い出があるのだと思う。私にも私だけの高桑さんがいる。高桑さんと40数年の思い出は私の心の中にある。そこにはもちろん先に逝った秋山黄洋もいるのだけれど。

高桑さんとの出会いやお付き合いは『高桑正敏の解体虫書』に書かせて頂いた。高桑さんは私のことを水戸昆虫研究会設立30周年記念の『るりぼし』30号に寄せてくれている。その中で高桑さんが書かれているが、最近のお付き合いは環境省や東京都のRDB作り、外来種対策の仕事などでの比重が高くなっていった。高桑さんを失ったことは、神奈川県や昆虫界にとどまらず、国の希少種保全施策の上でも大きな損失となったことは間違いない。

心よりご冥福をお祈りします。

((一財)自然環境研究センター理事)

## 高桑さん、採ったよ!

齊藤明子

2016年8月25日、高桑さんが急逝された。その日、届いたばかりの月刊むしの記事、高桑さんによる「セダカコブヤハズカミキリ探索記(4)」を読んだ直後に訃報メールが届いた。「うそでしょ?」と本気で目を疑った。

高桑さんが亡くなる2週間ほど前、山口県萩の近辺でセダカコブヤハズを採るにはどこへ行けば良いか、あるいは空白地帯のここへ行ってこい、でもよいので何か情報を下さい、というメールを高桑さんに送っていた。中国地方のセダカは難易度が高いということは高桑さんの何本かの記事を読んで予備知識があった。それならダメもとで空白地帯でトライしてみようか、などと思ってご病気の事は何も知らずに高桑さんに問い合わせしていたのである。いつもならすぐにご返事いただけるのに、今回はしばらく返信が無く、海外にでも採集に行かれているのかしら、と思っていた。返事が無いまま10日ほどして、体調でも崩して入院でもされていたら嫌だなあ、と思った矢先の訃報だった。

高桑さんには、1980年代から日本鞘翅目学会(旧日本甲虫学会)の運営などでお世話になった。そして、高桑さんは神奈川県博へ、さらに数年後私も千葉県博へ入り、カミキリ屋としてだけではなく、同じ博物館人として多くのことを教えていた

だいた。昆虫展で神奈川県博の標本をお借りする時もお世話になった。千葉県の行政関係でも無理を言って「千葉県希少生物及び外来生物に係るリスト作成委員」「千葉県博物館資料審査委員」をご歴任いただいた。また、外来種問題について各地の同好会などで普及啓蒙活動をやりたい、という高桑さんのお考えもあって、千葉県昆虫談話会にも入会して下さり、「自然史研究における外来種や偶産種の扱い方は?」というタイトルの公開講演会でお話しいただいた。高桑さんの説得力あるお話は確実に、聞いた人々の外来種に関する意識の高揚に繋がったと思っている。

これからも多くのことを教えていただかなければならなかったのに、こんなにも早く急逝されてしまったことが、とても残念でならない。甲虫界においても大切な方を失ってしまった。

9月上旬、高桑さんのアドバイス無しで中国地方のセダカコブヤハズに挑戦した。幸い、萩博物館のカミキリ屋椋木さんにご案内いただき、既知産地ではあるが5頭も採集することができた。天国の高桑さんはきっと、「アッコちゃん、えら〜い!」と誉めてくれているに違いない。

(千葉県立中央博物館)